協同の系譜 ②

第1部　川崎 平右衛門

白羽の矢

苦境の新田開発再興

農的社会デザイン研究所代表　蔦谷 栄一

日本における協同組合の祖・源流といえば、二宮尊徳や大原幽学が挙げられるが、川崎平右衛門定孝は時代をさらに約100年さかのぼる。

元禄7（1694）年3月15日に武蔵国多摩郡押立村（現府中市）で川崎家7代目安信の長男として生まれた。川崎家は北條氏に仕えていたが、豊臣秀吉の小田原城攻めを受けて、刀を捨てて武蔵国に下って百姓となり、代々名主を務めた。

平右衛門は幼い時から学問を好み、江戸に足を運んで、著名な漢学者である河村瑞軒や伊藤仁斎にも師事したとされる。百姓、農民とはいえ、相当な学識を身に着けていたとみられる。

平右衛門が生まれたのは元禄という、まさに経済の爛熟（らんじゅく）期であり、財政逼迫（ひっぱく）に伴って経済が停滞する下り坂の時代に育った。そして元禄地震、宝永地震、富士山噴火という大災害の時代でもあった。1703年の元禄地震はマグニチュード8・2、1707年の宝永地震はマグニチュード8・6と、東日本大震災に匹敵する大地震で、宝永地震の49日後には富士山が噴火して大災害を巻き起こしている。

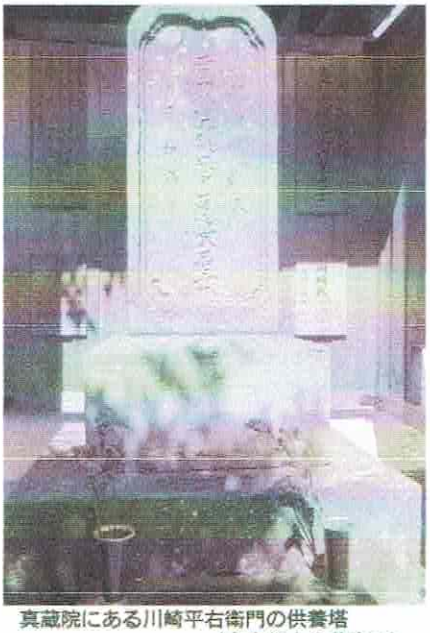
こうした時代状況を踏まえて平右衛門22歳の時、8代将軍に紀州藩主の徳川吉宗が就き、享保の改革を断行する。これは倹約と増税による財政再建を目指すものであった。財政の安定化のために年貢を強化して5公5民に引き上げ、これまでの検見法に代えて豊凶にかかわらず一定の額を徴収する定免法を採用した。

その一方で新田開発による水田面積の拡大に取り組み、越後紫雲寺潟や淀川河口などと併せて、武蔵野での新田開発にも着手した。ちなみに享保元（1716）年に開始した改革は、享保16（1732）年頃には財政は黒字基調に転換し、江戸城の奥金庫には新たに100万両の金が蓄えられたともいわれている。

その武蔵野新田の開発は、他の越後紫雲寺潟などの治水を中心とした新田開発とは異なり、水のない、ススキやカヤなどの茫々（ぼうぼう）とした草原が広がった所であった。1653年に開通した玉川上水からの分水に期待するか、井戸を掘りあてるしかない。利水の問題に飢饉（ききん）が重なり、例えば入植した1320余戸のうち、どうにか生活ができたのは35戸しかなかったと記録されるように、畑は開いたものの、男たちは江戸に日稼ぎに出て、女子どもと老人が残された。まともな耕作ができないだけでなく、食料が絶対的に不足して餓死者も出る始末であった。

こうした中、担当代官の上坂安左衛門が吉宗に直接呼び出されて問責され、上坂の上司であり責任者であった大岡越前守と相談して白羽の矢を立てたのが川崎平右衛門であった。平右衛門は新墾や殖産の業に詳しいだけでなく、近郊の窮民のために私財を投じて施与するなど篤農家として信望を集めていた。

上坂から懇請された平右衛門は、早速に自家の米倉、麦倉を開放して、小金井橋で炊き出しを行った。こうした一時的救済でしのぎつつ、恒久的な救済策として新田経営の確立に取り組むことになる。（次回は20日付）



真蔵院にある川崎平右衛門の供養塔（東京都小金井市で）

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。